

い土木工事において関係する各省庁や会社の理解と積極的な取組み方に期待したい。また、最新のノウハウに対する会員諸氏の公正な評価が行われるようになることも大切であろう。後者については、難しい場合もあるが、読者がその内容を十分に評価できるだけのデータ、理論等を提示することが必要である。

現在、第VI部門の論文集は全会員に配布されているが、他の部門と同様に有料化される方向に進んでおり、早く他部門の論文集と同じレベルに達するよう望んでやまない。人によっては第VI部門の論文こそが今後の土木技術を発展させるものであると知っている人もあり、一方では論文集というよりも協会誌的な色彩が強いと知っている人もある。これは、この論文集が現在まだ過渡的な段階であるための評価であると考えられるが、良い論文が多く集まるようになってくれば、おのずと評価が固まるものと思われる。

このような現状をふまえ、会員諸氏のこれからますます多くの良い論文が投稿されるよう願ってやまない。

(筆者・Taketo UOMOTO, 東京大学助教授 生産技術研究所)

ビッグプロジェクト考

大 草 重 康



第VI部門が独立した部門として論文集を発刊してから早くも3年目に入った。私のように根が土木の門外漢である者にとって、この論文集は大変ありがたく、従来の土木学会誌からも論文集からも得られなかった知識を得ることがで

きる。一方、第VI部門の編集が他の部門に比べて苦勞が多いということも、編集調整会議に出席させてもらっている関係上わかっているつもりである。そのようなことを承知のうえで日頃考えていることを少しばかり書かせてもらうことにする。

世の中が不況になると大型土木工事の企画といったものが必ず話題になる。土木技術者にとって大変ありがたいことではあるが、そのことと世間一般が大型土木工事をどう思っているかということは別問題であろう。まして、ある大型土木工事が本当に「後世への最大遺物」になるかどうかというような根元にかかわる問題が真剣に論じられたということを開いたことはない。社会資本の

充実ということが簡単にいわれているが、大型土木工事や公共投資が文句なく有用な社会資本に転化すると信じるのも、あまりに楽観的にすぎるのではないだろうか。

内村鑑三という人は、日本の近代思想史上に巨大な足跡を残した人である。広井公式で知られる広井勇とともに札幌農学校のクラーク先生の同門であり、内村の一高時代の教え子に、後に信濃川大河津分水工事をなしとげたキリスト者でありエスペランティストであった青山士がいる。内村が1894年夏にキリスト教徒の夏期学校で行った「後世への最大遺物」という講演は特に影響が大きいものであるが、その中で彼は後世へ遺すものとして「お金」、「土木工事」、「思想(文章)」を挙げたうえ、どれも実業家になってお金を遺せるわけではなし、土木技術者になれるわけではなし、文筆家になれるわけではないと知っている。結論として内村は誠実に生きる個々人の生き方が最大の遺物になるのだと知っている。幸いにしてわれわれは、内村のいう遺物の中の土木の分野に関連しており、その学会の会員である。現在行われつつある大小の土木工事、あるいは大型プロジェクトといったものが、内村鑑三のいう意味で後世への遺物になり得るのかどうか検討してみる必要がありはしないだろうか。また大河津分水完成時に青山士が書き残した「万象に天意を覚めるは幸なり、人のため、国のため」というような気持に会員大多数がなっているのかどうか。第VI部門の論文集がこのような内容にふみ込んだ討論の場になることを期待している。青山士が天に感謝しながら完成し、後世への遺物になると信じて疑わなかった大河津分水でさえ、後年に種々の問題を遺すことになった事実を忘れてはなるまい。

(筆者・Shigeyasu OKUSA, 東海大学教授
海洋学部海洋土木工学科)

3年目を迎えた第VI部門論文集に望む

河 上 省 吾



第VI部門論文集編集委員会が企画力とそれを着実に実現する実行力とによってすばらしい論文集を作ってくれたことにまず敬意を表わします。

土木学会の構成員は大学・官庁、建設業、コンサルタント、土

木関連製造業等の種々の職場で働く人とこれらの予備軍である学生とからなっています。

これらの人々に共通の機関誌が学会誌で、土木工学の各専門分野に関する情報提供や研究・技術開発成果の発表の場が土木学会の第Ⅰ～Ⅵ部門の論文集であると考えられます。

従来、論文集は学会の中でも研究・技術開発関係の仕事に従事している人々だけのためのもので、大多数の会員には無関係のものであるという認識が一般的であったようですが、基本的には、論文集は学会活動のバックボーンであるとともに、わが国の土木工学の技術開発の現況を示すものであり、またそうでなければならぬと思います。

したがって今後の技術革新の激しい時代においては、論文集の意義がますます大きくなるものと考えられます。

このような時期においては土木事業の実務に直接的に関係が強く、対象読者のきわめて多い第Ⅵ部門の存在意義はますます大きくなると考えられます。

以下に第Ⅵ部門論文集に望むことおよび提案をいくつか述べます。

① 第Ⅵ部門論文集ではその対象領域の論文をとりあげるのはもちろんですが、その領域の周辺部分すなわちⅠ～Ⅴ部門および土木工学と他分野の境界領域にかかわる論文を積極的にとりあげ、画期的な技術革新につながる可能性の大きい境界領域に関する研究・技術を発展させて欲しいと希望します。

一般に既成分野は硬直的な運営になりやすく、新しい分野を開拓しにくいという欠点がありますので、第Ⅵ部門の柔軟な運営に期待したいと思います。

② 建設会社、コンサルタントおよび土木関連製造業の各社の報告書などの中に適当な論文があれば、これを論文集に投稿していただくようにしたらいかがでしょうか。

各会社が競争して投稿するようになれば、技術開発の促進にもつながるのではないのでしょうか。

③ 建設工事や製造工場などの現場での工夫や特許などの紹介を土木工学の専門分野別に行えば、実務担当者だけでなく研究者にも有益ではないのでしょうか。

④ 建設産業の直面している重要課題、たとえば建設市場の外国企業への開放問題や建設業の労働生産性などについてテーマを設定し、一般の新聞が行っているような読者の投稿を募集して意見を載せるというページを作

るのはいかがでしょうか。

⑤ 上記の企画を実施するためには、論文、報告その他の原稿の査読基準を他部門と少し変える必要があると思います。

(筆者・Shogo KAWAKAMI, 名古屋大学教授)
工学部土木工学科

読みやすい論文集作りを

日下部 治



第Ⅵ部門論文集のファンの一人としてもう一度既刊の1～4号を読み直してみた。やはり読みやすい。不勉強な私は自分の属する第Ⅲ部門の論文さえもすべては読まない。いや、一つ一つの論文を読み通すには、随分と文献をたどっ

てみないと十分理解できないので読めないのである。それに比べ、第Ⅵ部門の論文は、おもしろくとにかく通読できる。ここに第Ⅵ部門の編集の方々の目指した読みやすい論文集作りの努力の成果があらわれているようである。今後ともぜひ続けていただきたいものである。

読みやすさはどこから来ているのだろうかと自分なりに考えてみると、おのおのの論文に『物を造り上げる』というストーリーがあるからではないかと思う。もちろん他部門の学術論文も物を造るという目的をもってはいる。しかし、その道は遠く、ひよっとして道はずれているのかもしれない、と第Ⅵ部門の論文を読んで思う。その例を数字でみてみると、この2年間第Ⅵ部門の1～4号に用いられたすべての参考文献446の中で、370号を数える土木学会論文報告集の中の論文はわずか6編、1.3%しかない。実際の設計・施工、技術開発の分野に直接的な情報として他部門の論文は使われていないのである。ここに『学会から必要な情報を集めることが出来ない』(No. 361/Ⅵ-3, p. 100)という不満の声を具体的に聞く思いがする。第Ⅵ部門論文集に寄せられる期待は大きい。

第Ⅵ部門論文集には「対談」や「技術サロン」がある。旧来の論文集のイメージでは生まれてこないものだが、これがまたおもしろい。特にNo. 367/Ⅵ-4の技術サロンはいい。2, 3年前のASCEのジャーナルに、実務経験豊かな著者による海洋開発の論文があった。そ